The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	近江路見学の記
Author(s)	栗生, 照子
Citation	懐徳. 1977, 47, p. 51-55
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/90555
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

近江路見学の記

栗生照子

「落花の雪に踏み迷う……」はあまりにも有名で、太平記といえばすぐ口誦さまれる道行文であるが、この中に読み込まれた番場・醒ヶ井・柏原が本日の見学地である。

先づ集合地米原駅の東方にある青岸寺へ。

今日は「大暑」である。灼け付くような屋並みを暫く行くと、正面の鬱蒼とした杉木立の中に神社、その横の楓葉の涼しい山際に寺門は開かれていた。ここは南北朝時代、この地の守護大名であった佐々木道誉が書写した法華経を奉納して開創したと伝えられるお寺で、名園のあることでも知られている。廻遊式の枯山水蓬莱庭園で江戸初期の作、松を主木にさつきの植栽、その中に近江石を豊富に配した豪華なものである。背後の楓の木々も見事で秋の風情もさこそと感ぜられた。殊に珍しかったのは水に見立てる砂が、枯滝の滝口から地中にかけて杉苔の敷かれているものであったが、この日照りで緑波を表すその苔が焼けて碧水の趣の感ぜられなかったのは惜しいことであった。手前には珍しい灯籠が置かれてある。風鈴の清韻が四辺の空気を引き締めていた。門前の緑のトンネルに四季の情趣を感じつつ駅へ戻る。

いよいよ米原駅をあとにバスで蓮華寺へ。国道二十一号線から右へ曲り旧中山道に入る。入口には「番場の忠太郎」とか「蓮華寺」の大きな標柱が立って迎えている。うねうねと五分程で門前の集落に着く。バス停の標識には「れんげいじ」と振り仮名があった。立派な勅使門である。門扉の菊桐紋や本堂の格天井にこのお寺の格の高さを知る。

南北朝時代六波羅探題であった北条仲時が、元弘の乱に敗れ鎌倉へ引挙げる途中この番場で佐々木道誉の輩下に阻まれ、無念の涙を呑んで部下四百三十二名と共に果てた処である。本堂の横、山の斜面に五輪塔の三段にぎっしりと身を寄せて並ぶ墓地は、鬼気迫るを感じ真夏の

日を忘れそぞろ肌寒ささえ覚えたが、お寺に残る「陸波羅南北過去帳」を拝するに及んでは胸の熱くなる思いであった。若冠二十八歳の総大将仲時に従って四十八歳の壮者から僅か十四歳の少年まで親子・兄弟と覚しい幾組かを混えた将兵が自害したのである。この固く強い信頼に結ばれた主従の心憎いまでの心情は太平記巻第九「越後守仲時已下自害事」に詳しい。

又このお寺は、建立や再建の変遷によってお釈迦様と阿弥陀様の二尊を本尊とする珍しいお寺でもあると御住職の説明であった。再建の由来を陰刻した弘安七年の銘のある国宝の銅鐘、その再建に力のあったこの地の豪族土肥元頼の塔といわれる鎌倉後期の宝篋印塔、他に斎藤茂吉の歌碑も見学「瞼の母」の忠太郎地蔵尊も昭和三十三年の春本堂の裏手に出来て、文人墨客の杖を曳く名跡である。

昼食をしたため講師先生からは近江源氏発祥の土地柄の歴史的なお話を伺い寺を辞す。門前の高架は名神高速道路で往き交う車の絶えず横ぎる音を聞きながら、旧街道に立って摺針峠へ通じている昔の東山道を想い蓮華寺に別れを告げた。

再び国道へ出てバスは一路東へ。伊吹山を前方に大きく眺めつつ走るこの二十一号線を柏原に入って間もなく国道を離れて左へ、清滝に向う。

車を降り鄙びた集落から少し登り勾配の参道に入る。桜の並木が続いているこの辺は昔は多くの寺坊が建っていたのだそうである。右手後方は田圃を隔てて伊吹山麓である。間もなくここも山を背にした清滝寺徳源院に着く。石垣の上に低く真白な築地塀の廻る高雅な感じの古寺である。門前には未だ花には遠いが萩が乱れていた。

ここは守護大名を誇った近江源氏佐々木氏京極家の菩提所である。歴代のお像をまつる位牌堂の横を入ると厳粛な塋域であった。墓地は二段になっていて石段を上った高所は奥行三米程の場所であるが、初代から十八基の宝篋印塔が白塀を背に一列に並んでいる。壮観である。中にやや低いのもあるが、何れも二・五米級のしかも鎌倉期から室町期にかけての立派なものばかりであった。私は礼拝することも忘れ手元にいただいた実測図とひき比べ見とれていた。婆沙羅の異名をとった道誉のお墓も特別のことはなく同列にあった。下段は桃山期から江戸期までのもので立派な石廟にはびっくりした。ここは石造美術研究家の垂涎の場所だそうである。

修理中の三重塔（室町時代建立）には小さいが周溝のあるのが珍しいと思った。庫裡でもお話をうかがい後山を借景にしたさつきの芝庭も拝見して静謐の気漲るお寺

を退出した。

次いで近くの小山の山頂に南朝の忠臣北畠具行卿のお墓を訪ねた。同時代の立派な宝篋印塔が松樹の下に一基淋しく夏の日を一ぱい浴びていた。京極道誉の助命歎願も空しく斬首された人であるがこうして手厚く葬られたのであろう。爪先上りの約五百米はちょっときつい山道であったが御老体の皆様もよく頑張って登られた。

長い日もよう〳〵西に傾き都合で柏原の艾屋「伊吹堂亀屋」や醒ヶ井の地名となった清水の湧出地の見学は割愛され、今宵の宿地へ向う。再び二十一号線を国鉄醒ヶ井駅まで戻り、丹生川の清流に沿って進むと今までの暑さをすっかり忘れる。街道の名残りのある家並は今に伝えられている。更に醒ヶ井峡谷を遡ると滋賀県立醒ヶ井養鱒場がある。明治十一年に出来たものであるが日本一を誇っている。観光客の帰ってしまった場内はまことに静かでここの山荘に一日の旅の疲れを憩う。

はじめに、この度の見学地を定めて下さったという酒井全太郎様の予期せぬ急逝を悼む。この会の最長老のお一人で今どき珍しい、しかし懐しい白髪のいが栗頭（失礼ですが）。磊落奇偉の方で見学会には必ず同道され、ちょっとおロの悪さも巧まざるユーモアとなって会員の気持を和ませて下さった酒井様。魂魄彷彿と天降られまして同席して下さることを願いつつ献ぜられた詩吟の数篇に明治の気風を感ずる夕宴であった。

料理はお皿毎に鱒であった。

上弦の月の下、鱒も眠ってか涼しく更けていった。

静澄な朝を迎える。木の間にさし込む日光は大日如来の後光にも似て尊い光であった。山の霊気とも感じた。その爽やかな光を浴びて何千尾とも知れぬ鱒が清流に群れ泳いでいる。中に黄色い鯉かと見紛うものもあり種類もいろ〳〵らしい。殊に細長い池に魚群の二つの輪を描いて泳いでいる様はまことに美事で、私は自分の影を水に落して何時までも見とれていた——。気が付くと赤とんぼも群れていた。この夏は蟬が静かでここでもニイ〳〵蟬とひぐらしの声を僅かに聞いたのみであった。

涼やかな山荘を後に第二日目の旅に出る。今日は長浜市内のお寺に重要文化財拝観の予定である。先づ市街を外れ北方にある神照寺へ。千手観音立像を拝する。半肉一木彫りのこの種のものは石像にはあるが木造では珍品の由、又真手に垂下手のあるのも大層珍しいと先生の御説明であった。他に毘沙門天立像と不動明王立像の静動二軀も拝した。工芸品としての華籠は流石に国宝だけあって見事であった。金銀鍍透彫文様で花唐草が輝いている。〃中等国語〃の表紙に使われ欧米にも出品されたと

いう第一級品である。しかもこれが十六枚もあるのである。この華籠に盛られた花々の散華される極楽浄土は何処に求められるのであろう。華鬘も重厚な金銅透彫のすばらしいものであった。先年見た葛川明王院の手作りの素朴な野草の華鬘を想い出したりもした。外の寺宝も拝見したが「馬の角」とは何であろう。私はここのお庭の拝見を忘れた。

次は総持寺。大門を入り参道を奥へ進むと広い境内の立派なお寺で弘法大師のお像が立っていた。本堂は灌頂型式建築で内陣も広々として大へん明るい。他のお寺の本堂と随分違う感じを受けた。江戸時代は近江・美濃の学問寺で凡ての儀式が行われていたのだそうである。聖観音立像は一木彫りの藤原時代の作。同じ十一世紀でも平等院の阿弥陀様より前の作であると先生から教えていただくと時代性がよく解る。立派な愛染明王立像をも拝し、美しい池庭の見える広い結構な客殿を吹き放った涼しいお座敷をお借りして、鱒の姿ずしのお弁当の中食をすます。

いよ〳〵最後の真広寺。前以てお願いしてあるのにもかかわらず改めて壇家の総代さんの御了解を得て別棟の新しいお堂を開扉していただいたのであるが、容易ならぬ気配であった。恐る懼る前の人の肩越しに拝すると、鈍い金色の薬師様が坐っておられた。

平安後期の寄木造りで挿し頸になっており像底は厚板が貼ってあって落ち着きがなかったとは後での先生のお話であった。

急ぎ拝観し、民家の間を足早にバスに帰る。その民家の軒先に咲いていた夏の花の赤や黄、緑の葉までがジリ〳〵と暑い日射しの中に照り返っていた。

この時私はフッと思った。作家の井上靖が十一面観音巡拝をはじめられた頃、やはり直には拝し得ず何十年に一度の御開帳と定っていて、何度も足を運んで苦労されたことの書かれていた「星と祭」を。

先生の御説明の場所はとう〳〵バスの中になってしまったが、国宝を誇り高く護りきっている信心深い土地柄での拝観のむつかしさと、これを拝観見学する我々もそれなりの心構えを持って心より拝する敬虔な態度でなければならないと痛感させられ帰途に着いたがよい教訓ともなった。

予定より一時間も早い解散になったので、私は一人で摺針峠を訪ねることにした。近江鉄道で次の鳥居本駅で降り、軒の低い家並の旧中山道を米原の方へ戻るように辿る。駅の近くには「明治天皇御小休所」となった立派な門構えの邸宅やひっそりと「合羽所」の看板の下った

家も残っている。十五分程で国道八号線と合する所に出る。山手にゆるやかな坂道が延びている。傍に「旧中仙道、明治天皇御聖跡磨針峠望湖堂、弘法大師縁の地、是より東へ山道八百米」と書かれた大きな新しい石標が建っている。裏を見ると「昭和五十二年五月、彦根市長井伊直愛書」とあった。峠への入口である。今は車の通れる簡易舗装の道になっている。山の中へ入って行く。ゆっくり十五分程すると僅かに古の急道が残してあって手すりまで取付けて楽に上れるように配慮されていた。登りきるとそこがもう峠であった。正面の石段の上に「神明宮」の額のかかった鳥居がありその奥は小祠を囲んで杉の大樹が数本、天を突いて聳えている。弘法大師が植えられたという伝説がある。

むかし弘法大師が修行の途中この峠に着くと石で斧を磨いている老人が居った、どうするのかと尋ねると斧を磨って針にするのだという、不思議なことをする人もあるものだと見直すともうそこに老人の姿はなかった。大師は

道はなど学ぶることの難からん
斧を針とせし人もこそあれ

の歌を詠じ、ここを磨針峠と命名し、杉の苗を植えて立去った。

（「近江むかし話」より）

明治天皇の御休みになられたという望湖堂を峠の茶屋ぐらいに考えていた私は目を見張った。石垣の上に立つまるでお城の見張り櫓である。真白な塗り壁の立派な建物である。生憎今日はここの方は旅行中とかで留守であった。この峠はさ程高いとも思われないのにこの望湖堂からは竹生島を真中に琵琶湖の眺められるよい位置になっている。峠を向うへ下れば昨日訪ねた番場の蓮華寺へと通じているのである。峠の名に憧れて訪ねてみたがよい所で、わざ〳〵来た甲斐があったとうれしかった。

二日間、満ち足りた見学会であったことを感謝しつつ峠をくだった。